

# 有無で評価する調査項目

## 3つの評価軸

認定調査員用

e-ラーニングシステム

テキスト教材

# 有無で評価する調査項目

## 能力

- 寝返り
  - 立ち上がり
  - 座位保持
  - 歩行 等
- 
- 意思の伝達 等
  - 場所の理解 等

## 介助の方法

- 移動
- 排尿
- 排便
- 食事摂取
- 買い物 等

## 有無

### 麻痺等・拘縮

- 麻痺等
- 拘縮

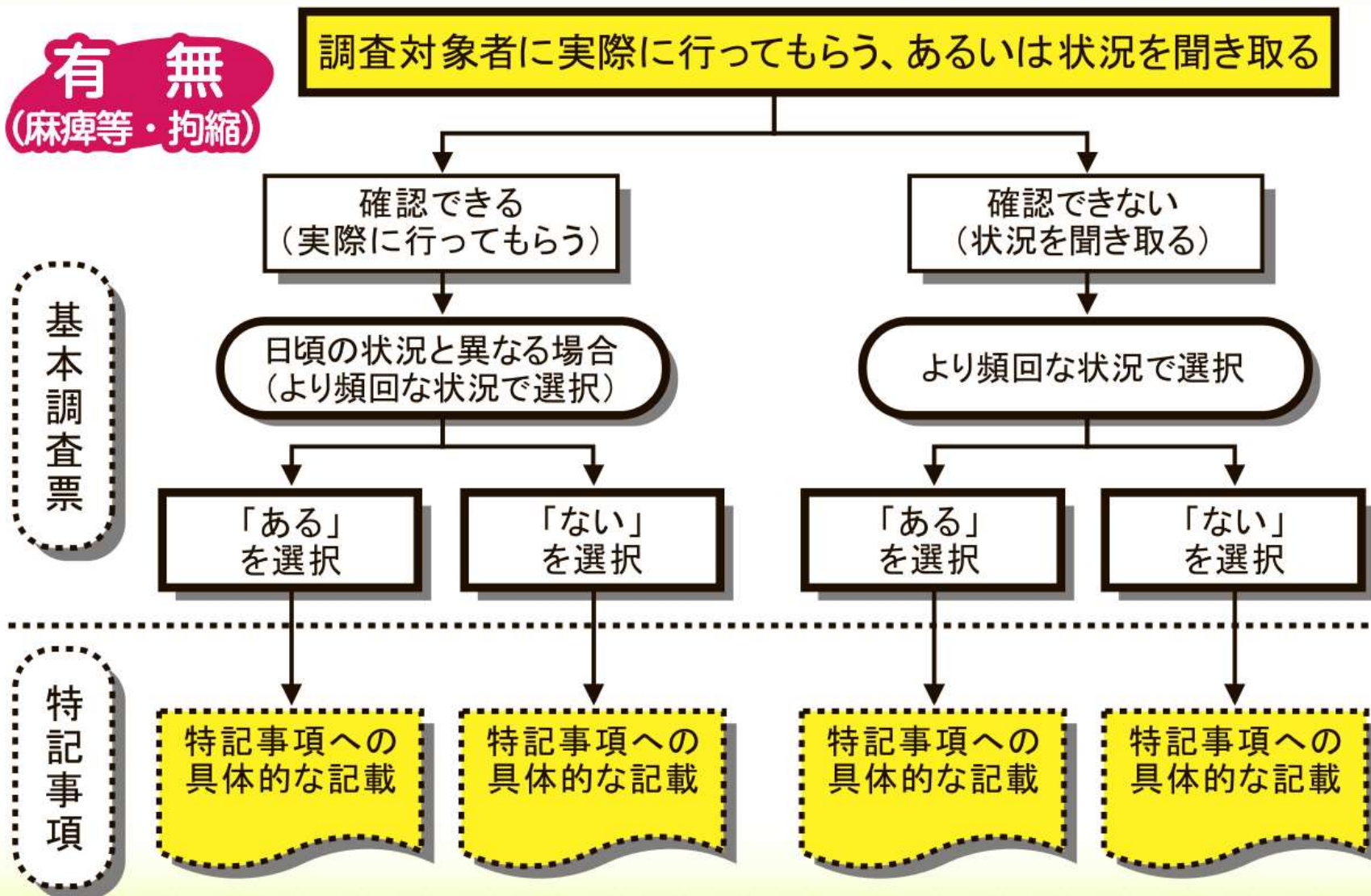
### BPSD 関連

- 徘徊
- 大声を出す 等

# 有無で評価する調査項目

	能力	介助の方法	有無
主な調査項目	身体 の能力 認知 の能力	生活機能 社会生活への適応	麻痺等・拘縮（第1群） BPSD 関連（第4群など） 特別な医療
基本調査の 選択肢	「できる」 「できない」	「介助されていない」 「見守り等」 「一部介助」 「全介助」	「ない」 「ときどきある」 「ある」
基本調査の ポイント	調査対象者の能力	介助の「方法」 （最終的に提供されている 介助（提供されるべき介助））	障害や現象（行動）の有無  <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 2px; text-align: center;"><b>麻痺等・拘縮など</b></p> <p>調査対象者の能力</p> </div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="background-color: #006d4c; color: white; padding: 2px; text-align: center;"><b>BPSD</b></p> <p>行動の 発生頻度</p> </div> </div>
特記事項の ポイント	日頃の状況 選択根拠 （判断に迷う場合）	介護の手間と頻度	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; width: 45%;"> <p>日頃の状況 選択根拠</p> </div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; width: 45%;"> <p>介護の 手間と頻度</p> </div> </div>

# 有無（麻痺等・拘縮） 調査の流れ



有無（麻痺等・拘縮）の項目に関する調査は、  
確認動作で可能な限り実際に「試行」。



## 【確認動作を行わないケース】

- 本人や家族の「同意が得られない」場合
- 「危険」と判断される場合

## 基本調査の留意点（2）

～確認動作と日頃の状況～

確認動作と聞き取った日頃の状況が一致する場合

➡ 各調査項目の選択肢の選択基準にしたがい、選択肢を選択。

聞き取った日頃の状況が、確認動作と異なる場合

➡ より頻回（もっとも多く発生する）な状況で選択肢を選択。

確認動作を行ってもらえなかった場合

➡ 聞き取った日頃の状況に基づいて選択肢を選択。

**ポイント**

どのような場合にも、日頃の状況と選択した根拠を具体的に特記事項に記載することが重要。

有無（麻痺等・拘縮）

## 特記事項のポイント

- 確認動作と日頃の状況が「異なる」場合
- 基本調査項目の選択肢で「どちらの選択も妥当」と感じた場合



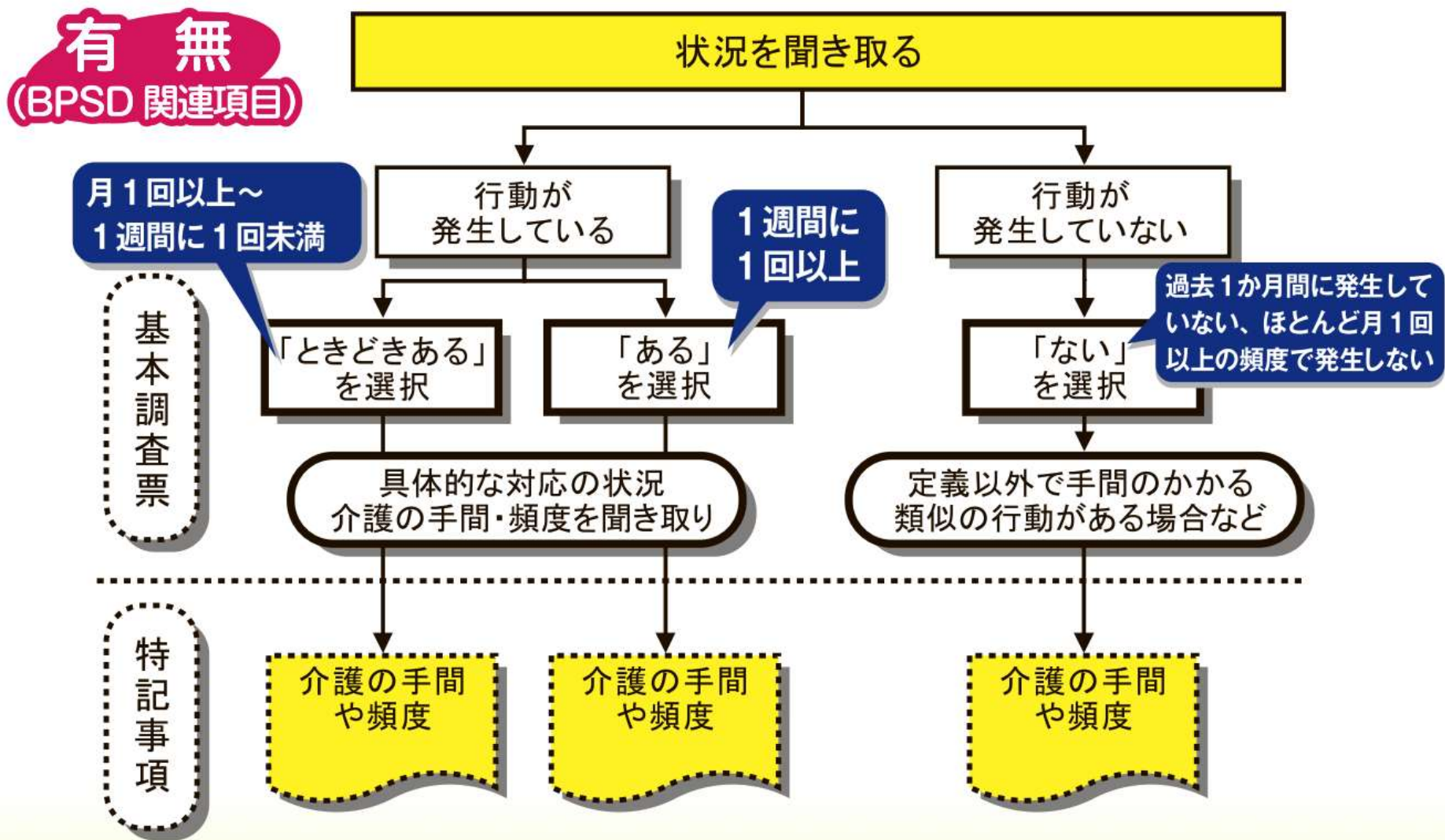
特記事項に記載し、審査会の判断を仰ぐ  
(審査会の一次判定の修正)

### 1-1 麻痺等の有無の例

調査時、体調が少し悪く、関節等の痛みがあるとのことで、申請者に実際に行ってもらえなかった。

申請者と家族に、上肢と下肢の麻痺等の有無の確認方法に示す動作が行えるかどうか確認したところ、上肢については、問題なくできるが、両下肢はできないとのことで、より頻回な状況に基づき選択し、「左下肢」「右下肢」を選択した。

# 調査の流れ





有無（BPSD 関連）

## 基本調査の留意点

BPSD 関連の項目は、当該行動の有無に基づき選択

### 4-5 同じ話をするの例

週 1 回以上場面や目的からみて不適當にしつこく同じ話をする場合は、介護者が対応している場合も、していない場合もどちらも「ある」を選択。



選択肢の選択のみでは、  
どのような介護の手間が発生しているか確認不能。

具体的な介護の手間は、特記事項に記載。

## 特記事項のポイント（1）

～特記事項は、介護の手間を記載～

特記事項には介護の手間と頻度を記載し、  
介助量を把握できるようにすることが重要。

### 【例】「一人で出たがる」が「ある」

週1回ほど、一人で玄関から自宅の外に出ってしまうため、介護者は毎回のように探しに出ている。



介護の手間に差

ほぼ毎日、一人で玄関から自宅の外に出ってしまうため、介護者は毎回のように探しに出ている。

### 【例】「感情不安定」が「ある」

週1回ほど、何の前触れもなく突然泣き出すことがあるが、特に対応はとっていない。



介護の手間に差

ほぼ毎日、何の前触れもなく突然泣き出すことがあり、なだめるのに傍らで15分ほどは声かけを行っている。

有無（BPSD 関連）

## 特記事項のポイント（2）

～基本調査項目にないが、  
介助が行われている場合①～

基本調査項目の定義に含まれないBPSD関連の行動で、

手間が発生している場合も「特記事項」に介護の手間を記載。

### 基本調査項目の定義に含まれていない介護の手間が発生している場合 4-3 感情不安定の例

#### 対象者の状況

- 「死にたいわ」と毎日言うが、感情不安定とまでは言えない。
- 家族がなだめている。

#### 選択の基準

- 定義された行動の発生頻度で選択。
- 手間は特記事項。

#### 認定調査票

##### 基本調査

感情の不安定さが確認できないため  
**ない**を選択。

##### 特記事項

家族が毎日なだめている。

一次判定

二次判定

二次判定で、  
介護の手間を考慮

有無（BPSD 関連）

## 特記事項のポイント（3）

～基本調査項目にないが、  
介助が行われている場合②～

「認知症高齢者の日常生活自立度がⅡ以上」のケースについては、  
BPSD関連項目等について「介護の手間」の発生の有無を確認。

### 特記事項の例「4-15 話がまとまらず、会話にならない」

家族によると申請者の言動が以前と変わってきており、話していることに整合性がなくなっているように感じることもあるとのこと。「会話が成立しない」というほどではないので「話がまとまらず、会話にならない」は「ない」としたが、家族は心配で外出等を控えて、1人にならないようにして見守っている。

### 特記事項の例「認知症高齢者の日常生活自立度の選択」

車の運転が好きで、自分で運転しようとするが、家族が危険と判断し、やめるように言っている。認知症の周辺症状としての行動ではないようにも見えるが、申請者が車の運転に固執しており、家族がカギを隠していることで、口げんかになることが週に1度はあるといった状況である。

他に適切な項目がないため、当項目に記載した。